

歴文クラブ27年11月研修会

資 料

1、11月歴文研修会実施要領

2、資料

①幻住庵

②永源寺

③聖武天皇の遍歴

④その他（別添）

・幻住庵記

・永源寺案内地図

3、出席者名簿

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ

(担当世話人：川井秀夫・古川 祐司)

11月歴文研修会 実施要領

日時：11月24日（火）8：30集合
場所：大和西大寺駅南口
昼食：永源寺周辺にて適宜とってください
雨天：雨天でも実施します

《行程プラン》

出発①近鉄西大寺駅南口 8：30⇒R24⇒京奈和・宇治 9：00

⇒石山IC 9：30⇒幻住庵 9：50（見学30分）

出発② 10：20⇒瀬田東IC 10：40⇒八日市IC 11：00

⇒（R421）永源寺駐車場 11：20⇒散策と昼食休憩（60分）

出発③ 12：20⇒紫香楽宮跡 13：10（見学30分）

出発④ 13：40（県道5）⇒和東 14：10安積親王墓・正法寺（40分）

出発⑤ 14：50（県道5）恭仁京 15：00（見学30分）

出発⑥ 15：30（R163）⇒奈良駅着 16：30⇒解散

地域情報

- *ひとみワイナリー 東近江市山上町2083（0748-27-1707）
- *岡本こんにゃく本舗 東近江市永源寺高野町328（0748-27-0129）
- *永源寺前駐車場（0748-20-1450）
- *自然休暇村センター（0748-27-0203）
- *永源寺タクシー（0748-27-2051）、近江タクシー（0748-37-0106）、
滋賀第1交通（0748-37-4000） 1時間4420円

幻住庵（げんじゅうあん）

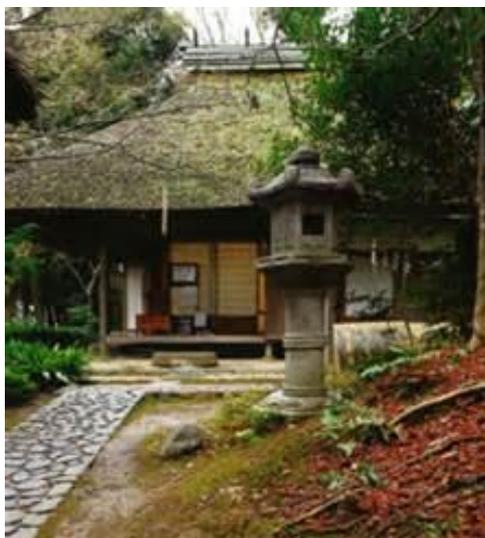
「奥の細道」の旅を終えた松尾芭蕉は、翌年の元禄 3 年（1690 年）の春から、夏にかけて、彼がこよなく愛した近江の地で過ごした。

「行く春を近江の人と過ごしける」

膳所の義仲寺無名庵に滞在していた芭蕉は、門人の菅沼曲水の奨めで同年 4 月 6 日から 7 月 23 日の約 4 ヶ月間を石山の奥地にある「幻住庵」で隠棲することになる。ここで「奥の細道」に次いで著名で、「石山の奥、岩間のうしろに山あり、国分山といふ」の書き出しで知られる「幻住庵記」を著した。

「幻住庵」は、菅沼曲水の伯父幻住老人（菅沼定知）の別荘であったが、死後放置されていたのを手直しして提供したものであり、近津尾神社境内にある。芭蕉は当時の印象を「いとど神さび」と表現したが、その趣は 21 世紀の今も変わらず残っている。

現在の建物は 1991 年 9 月に芭蕉没後 300 年記念事業「ふるさと吟遊芭蕉の里」の一環で復元したものであり、敷地内には幻住庵記に「たまたま心なる時は谷の清水を汲みてみづから炊ぐ」との記述があるように、芭蕉が自炊していた痕跡「とくとくの清水」が今も木立ので水を湧き出し清流となって流れ下っている。「先づ頼む 椎の木も有り 夏木立」と詠んだ^{しい}椎の老木も、住居跡に未だ健在であり、興趣をそそる。



永源寺（えいげんじ）

滋賀県東近江市にある臨済宗永源寺派の本山。山号は瑞石山。

紅葉の美しさで知られる。開山忌が、毎年 10 月 1 日に行われる。

歴史

1361 年創建。開山は寂室元光（正灯国師）、開基は佐々木氏頼（六角氏頼）。中世戦乱期に兵火により衰微したが、江戸時代中期に中興の祖とされる一糸文守（仏頂国師）が住山し、後水尾天皇や東福門院、彦根藩の帰依を受けて、伽藍が再興された。1873 年に明治政府の政策により東福寺派に属したが、1880 年に永源寺派として独立した。

鈴鹿山脈を挟んで東側の三重県いなべ市にも永源寺の一部があったといわれ、永源寺跡と呼ばれる場所がある。三重県いなべ市の伝承では、永禄年間（1558 年 - 1570 年）織田信長家臣である滝川一益の軍勢が、北伊勢地方の寺を焼き払いながら迫って来たため、三重県側の永源寺の僧は兵火を逃れるため、寺の宝物などを持ち一夜にして竜ヶ岳の南側にある鈴鹿山脈の石樽峠を越えて、近江の永源寺へ逃れたとされているが、永源寺側の記録には一切ふれられていない。

本尊は世継観世音菩薩。寺内には彦根藩主井伊直興公の墓所がある。

東近江市永源寺地区は、永源寺コンニャクや永源寺蕎麦、政所茶の産地であり、鈴鹿山系の谷の蛭ヶ谷町、君ヶ畑町は木地師発祥の地として知られる。また付近からは平成 22 年に国内最古級・1 万 3 千年前の土偶が発掘された。



聖武天皇の遍歴

《略年表》（『続日本紀』より）

◎701年（大宝元年）首（おびと）皇子誕生。父、文武天皇、母、宮子夫人。

707年（景雲4年）文武天皇崩御、元明天皇即位。

714年（和銅7年）首皇子の立太子、元正天皇即位。

716年（霊龜2年）藤原不比等の娘の安宿媛（後の光明皇后）を夫人とする。

720年（養老4年）藤原不比等死去

◎724年（神龜元年）聖武天皇即位、長屋王を左大臣とする。

◎729年（神龜6年）2月、長屋王の変。8月藤原夫人（安宿媛）の立后。

736年（天平8年）天然痘が大宰府より近畿・四国へと広がる。九州・畿内の田租を免除。

◎同年、藤原4兄弟、相次ぎ天然痘で死去。

◎738年（天平10年、橘諸兄を右大臣、玄昉を僧正にする。

740年（天平12年）2月、河内国大県郡の知識寺で廬舎那仏を拝し大仏造立を決意。

◎740年（天平12年）8月、藤原広嗣が大宰府で兵をあげる。

◎同年10月、天皇東国巡行。伊勢国、美濃国、山背国玉井頓宮へと巡行。

12月15日、平城京から恭仁宮へ行幸し、都を移す（恭仁京遷都）。

741年1月、天皇、恭仁宮で朝賀を受け、伊勢神宮に遷都を報告。

同年2月、国分寺・国分尼寺建立の詔

◎742年8月、天皇、紫香樂離宮の造営を開始する。

743年10月、天皇、紫香樂宮で大仏造立を開始。「大仏造立の詔」。

744年1月、第2皇子の安積親王が薨去。

◎同年2月、天皇、紫香樂宮へ行幸し、難波宮を都と定める。

744年～745年、紫香樂宮周辺に山火事が発生。

◎745年5月、天皇、平城京に還都する。

1、経緯

《生い立ち》

聖武天皇は、701年（大宝元年）文武天皇の第一皇子として生まれた。幼名は首（おびと）。母の（不比等の子）宮子は、出産後の心的障害があつて人と会わず、僧玄昉の力で737年になって病が癒え、初めて聖武帝と対面する。

707年8月（景雲4年）7歳で父文武天皇と死別、若年のため祖母である元明天皇が中継ぎの天皇として即位。

714年（和銅7年）には正式に立太子したが、病弱であつたことや、皇親勢力と外戚の藤原氏との対立もあり、即位は先延ばしにされ、715年（霊龜元年）

文武天皇の姉である元正天皇が「中継ぎの中継ぎ」として皇位を継ぐ。

724年（神亀元年）元正天皇より皇位を譲られて24歳で即位する。4代の天皇を支えてきた藤原不比等は、すでに720年に薨去し、左大臣長屋王が政治の中心となっていた。次第に皇親勢力と不比等の子の藤原4兄弟とは次第に対立するようになる。神亀6年、長屋王が誣告（藤原氏の策謀といわれる）によって自殺に追いやられると、これに代わって藤原4兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）が政治の中樞を独占する。しかし7年後の天平8年、4兄弟は、当時流行が始まった天然痘に罹り相次いで急死する。

代わって政治を担ったのは、橘諸兄（光明皇后の異父兄）である。右大臣となるや、唐より最新の知識を持って帰国した吉備真備、僧玄昉が起用され、藤原一門の勢力は大幅に後退する。

《藤原広嗣の乱》

天平10年（738年）藤原宇合の長男・広嗣は大養徳（大和）守から大宰少弐に任じられ、大宰府に赴任した。広嗣はこれを左遷と感じ、強い不満を抱いた。天平12年8月29日、僧正玄昉と吉備真備を弾劾し、その処分を求めて挙兵する（藤原広嗣の乱）。朝廷は東海道、東山道、山陰道、山陽道、南海道の五道の軍1万7千人を動員し、11月5日にはこれを鎮圧し、広嗣は処刑される。

その報告が平城京に届く前に、10月29日聖武天皇は東国巡行（伊賀国、伊勢国、美濃国、近江国）のため都を出る。これが聖武天皇の宮遷りの始まりとなる。九州で起きた広嗣の乱を聖武天皇が極度に恐れたためとか、疫病を避けての行幸だったとも云われている。（違った見解もある。下記）

《恭仁京への遷都》

東国巡行から山背の地に帰り着くや、天平12年12月15日、天皇は直ちに恭仁京（山背国相楽郡）への遷都を命ずる。この地が選ばれた理由として、ここを本拠地としていた右大臣（のち左大臣）橘諸兄の勧めのあったことが指摘されている。一説には、続日本紀の記述から、都づくりは事前に準備されていて、周到に用意された行動ともいわれる。

741年（天平13年）の9月に左京右京が定められ、11月には恭仁京に対して「大養徳恭仁大宮」という正式名称が決定される。大極殿が平城京から移築され、大宮垣が築かれて、宮殿が造られた。条坊地割りが行われ、木津川に大きな橋が架けられた。しかし、恭仁京は都としては完成しなかった。

743年（天平15年）の末には、紫香楽宮造営のため、恭仁京の造作は停止される。

《紫香樂京の造営》

742年秋、造営に着手し、743年（天平15年）には信樂の地に廬舎那仏像の造営することを発願する（廬舎那仏造願の詔）。744年11月、甲賀寺にて天皇親臨のもと、廬舎那仏の骨柱を建てて工事に着手する。しかし、これには反対も多く、都の周辺の山では放火による火事が起きる。

一説には、恭仁京を唐の洛陽に見立て、その洛陽と関係の深い龍門石窟の廬舎那仏を紫香樂の地で表現しようとしたとする見方がある。

《難波宮遷都、さらに信樂宮へ》

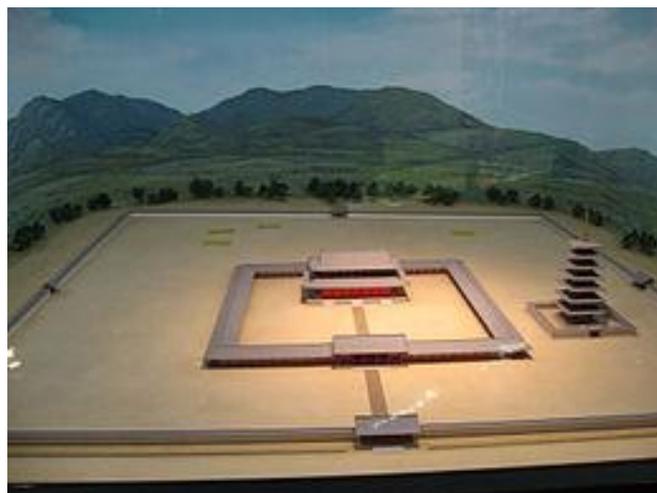
744年（天平16年）1月1日、天皇は百官を招して恭仁京・難波京のいずれを都にすべきかと諮問。紫香樂は反対者が多く、恭仁京と難波宮に賛否が分かれるが、権力を保持していた元正太上天皇は難波宮を宣言。2月には恭仁京の高御座を移し、都は難波京に遷る。

さらに、745年（天平17年）1月、都は信樂へ遷る。（続日本紀には「新京に遷る」と記載する）。しかし、同年4月、信樂京の周りに頻々として山火事が発生し、天皇も避難する事態が起きる。

《平城京へ遷都》

745年（天平17年）5月、四大寺の衆僧を集めて、都の選考を諮問、都は再び平城京に戻されることとなる。廬舎那仏の鑄造も甲賀寺から現東大寺の寺地に移された。748年（天平18年）恭仁宮大極殿は山城国分寺に施入された。

2、恭仁京・・・大養徳恭仁大宮（やまとのくにのおおみや）



山城国分寺（恭仁京）復元模型。築地に囲まれているのが金堂（大極殿）。右が七重塔。

（京都府立山城郷土資料館）1957年7月1日「山城国分寺跡」として、国の史跡に指定。

その後の学術調査の進展に伴い、2007年2月6日付で史跡指定範囲が拡大され、指定名称も「恭仁宮跡（山城国分寺跡）」に変更された。

《恭仁京》

宮は平城宮を簡略化した程度で、南北750メートル、東西560メートルの南北に長い長方形であった。朝堂院も平城宮より東西に幅が狭く、板塀で囲まれていた。西側は狭い谷間、東側は木津川の氾濫原によって宮や京の造営が制約され、全体的に小規模であったとみられ、条坊制を示す遺構も確認されていない。

《山城国分寺》

遷都後、宮城跡地は山城国分寺として再利用される。大極殿は金堂に転用され、南北3町（約330m）、東西2町半（約275m）の広大な寺域を有していた。金堂の東側は国分寺の鎮守社である御霊神社の境内地だったとされる。

現在は広大な平原となっており、金堂（大極殿）礎石と七重塔礎石が地表にのこされている。

山城国分寺跡



七重塔跡の礎石



3、安積親王

728年（神亀5年）聖武天皇の第二皇子として生まれる。

母の県犬養広刀自は、聖武との間に安積親王、井上内親王、不破内親王の一男二女をもうけた。聖武天皇の妃となった背景には、県犬養氏の族長的立場にあった橘三千代の推挙があったと考えられている。井上内親王は早くから伊勢神宮の斎宮に決定しており、安積親王は当初から皇太子としての期待はされなかったとも考えられる。なお、井上内親王は、光仁天皇の皇后となりながらも、廢後の末に不自然な死を遂げたとする悲劇的な運命を辿った。

生まれた年に、第一皇子で皇太子の基皇子が死去したので、聖武天皇唯一の皇子となり、皇太子の最も有力な候補となった。藤原氏は対抗措置として光明皇后を母に持つ阿倍内親王（後の孝謙・称徳天皇）の前例のない立太子を実現する。強力な後盾がなく、安積親王は複雑な立場となる。

天平8年（736年）5月には、すでに斎王になっていた姉の井上内親王（後の光仁天皇皇后）のために写経をおこなっている記録がある。天平15年（743年）には恭仁京にある藤原八束の邸にて皇子のための宴が開かれ、当時内舎人であった大伴家持も出席した。この時、家持が詠んだ歌が『万葉集』に残されている。

天平16年（744年）閏1月11日、聖武帝の難波宮行幸に随行し、その途中に桜井頓宮で病気（脚氣）になり恭仁京に引き返すが、2日後の閏1月13日に17歳で死去した。一説には、恭仁京の留守役であった藤原仲麻呂に毒殺されたともいわれる。

安積親王墓



安積親王は744年17歳で死去。平城京・恭仁京と紫香楽宮とを結ぶ街道を愛した皇子のために、和東の地に葬ったと伝わる。この墓所は、別名「太鼓山」とも呼ばれ、茶畑に囲まれた陵墓から眺める風景は素晴らしい。

正法寺



聖武天皇の第2皇子安積親王の冥福を祈って行基が創建したとされる禅寺。南北朝の戦いで荒廃していたが、1644年に現在の地に古堂を移し再建された。秋の紅葉が見事なスポットである。

紫香楽宮（ウィキペディアより抜粋）

740年（天平12年）の藤原広嗣の乱ののち、聖武天皇は恭仁京（現在の京都府木津川市加茂地区）に移り、742年（天平14年）には近江国甲賀郡紫香楽村に離宮を造営してしばしば行幸した。これが紫香楽宮である。

翌743年（天平15年）10月、天皇は紫香楽の地に盧舎那仏を造営することを発願した。これは恭仁京を唐の洛陽に見立て、その洛陽と関係の深い龍門石窟の盧舎那仏を紫香楽の地で表現しようとしたものとみられる。12月には恭仁宮の造営を中止して、紫香楽宮の造営が更に進められた。

紫香楽の地は、当時の感覚においては余りに山奥である事から、ここを都としたことを巡っては諸説があり、恭仁京周辺に根拠を持つ橘氏に対抗して藤原仲麻呂ら藤原氏に関与したとする説や天皇が自らの仏教信仰の拠点を求めて良弁・行基などの僧侶の助言を受けて選定したとする説などがある。

紫香楽宮（甲賀寺）跡

かつては甲賀郡信楽町（現・甲賀市）黄瀬・牧地区の遺跡（1926年「紫香楽宮跡」として国の史跡に指定）が紫香楽宮跡と考えられていたが、北約1kmに位置する宮町遺跡から大規模な建物跡が検出され、税納入を示す木簡が大量に出土したことなどから、宮町遺跡が宮跡と考えられるようになり、黄瀬・牧地区の遺跡は甲賀寺（甲可寺）跡であるという説が有力である。

2005年には宮町遺跡を含む19.3ヘクタールが史跡「紫香楽宮跡」に追加指定されている。現在でも、「宮町」「勅旨」「内裏野」などの地名が残り、往事の宮城の名残を残している。



紫香楽宮跡（甲賀寺跡）

紫香楽宮跡地図

